第四編　學生生活

一

學生たちにとつて、京都帝國大學文學部なるものゝ第一印象は、何んとしてもあのペンキの剝げた古色蒼然たる木造の建物であらう。そして我が文學部がこの近代文明からとり殘されたかのやうに見える建物を中心として、華々しい三十年の歷史を展開して來たことを知つては再び驚きの眼を瞠るかも知れない。田舍の小學校の校舍ともいひたいこの一棟は、過去の文敎上の業績に對しては、凡そ、ふさはしからぬものであらうが、この裡にこそ、我が文學部三十年の光輝ある傳統と又未來への進展が潜むのである。

京都文科大學の創設は對露戰勝の後國民的感情の興奮が全國的に卷き起つてゐた頃を背景とする。しかも、この後の財政的困窮のためか、草創當時の文科大學の建物は、全くみすぼらしくもあつた。

二

開講の當初は學生の數も極めて少く、學究生活としては實に理想的な條件を備へてゐた。四十三年の史學科第一回生の手記にも「學生は十一名選科二名にして下級生も無ければ上級生もなく從つて煩はしき因襲もなければ囚はるべき傳統もなく凡て自由にして創造的なりき」と記されてゐる。それは正に學問の桃源境とも云ふべく、一哲學科の學生は、三年の學生々活を回顧して、「講義はすべて筆記する例なれば余も一語を落すまじと必死となりてペンを走らせぬ……これ手の運動にぶき余には尠からぬ苦痛なりき……されど余は思ひなほしぬ、余の渇する所の泉なり、よし釣瓶は重くとも曳き上げざるべからずと、かくてインキとペンとノートとの間に沒頭して年はくれぬ……若し夫れ蠅頭の文字一時間に七八頁に上るものをつゞけ樣に七八時間を筆記すれば余の頭は水を蒸發しつくしたる蒸汽機關の如く余の手は調節機能を失へる機械の如くなるを覺ゆるなり」と言つてゐるやうに、今から思へば、その文章にもすでに悠古のへだゝりがある。全く文科大學は教官四五人に對して學生三學級合せて十名内

外の科が多かつた頃の事であるから、日々の聽講は可成り多忙であるのが普通であつたらしい。然し流石に三回生の頃になると「かくて強きたくましき駟馬の間にはさまれてよろめき乍ら進みし余は第三年目に至りて突如として其駢駕の羈を解かれたり……今學年は只論文のみを餘したるなり、己が論文の討究は自由なり……余はこゝに初めて放たれたるものゝ自由なる空氣を吸ふの感ありき、正しく眞實なる學問の杯より一杯を飲み得たるものなるべし……余が前途の希望は泉の傍に初めて立ちし時よりは一層強く輝くを覺ゆ、余や多幸なる哉、今大學を去るに臨みて謝意多し。」としてゐる。また明治四十一年入學當時を回想して「思へ根本的に我精神の渴望を醫すべき泉に對して立てる自覺せる時の滿足を、余の希望は實に大なるものありき」とするのは、大學生活に對する遠大なる希望を抱いて入學した此の一哲學の徒が最後まで自分の學問的感激を失ふ事なく業を了へる事が出來たのを知るのである。事實此の一文に示された樣な當時の文科學生達の學問的熱情は、明治末年の圖書館閲覽統計に法科二二七〇人に對して文科三三九四人を以て第一位を占めてゐる事によつても

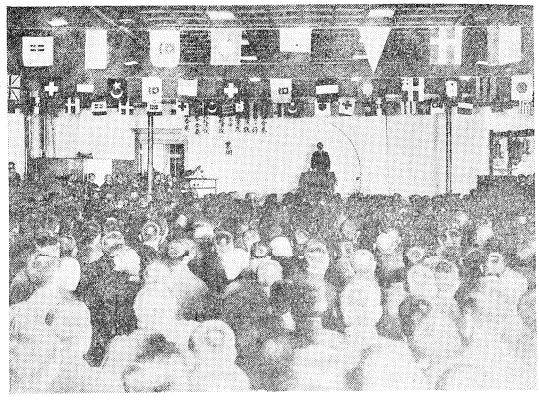
窺ふ事が出來るであらう。

かやうな學問生活の一面に對して、一方には當時帝國大學以文會及び運動會があり、又文科大學自體にも既に學友會が組織せられてゐて教官學生相互の親睦をはかる樣々な催しが折にふれて行はれ京洛三年の學生々活に盡きせぬ潤を與へたのである。

以文會は明治四十二年、會員相互の親睦を計り其智識を通融せしむる事を目的として創立されたものであるが、後には、運動會と合して、大學々友會となつた。當時の學友會は學生々活の上に多大の影響を持つてゐたのである。學生集會所が建てられたのも四十年であつた。今は、集會所の會合といへば何かうそ寒い氣のするものであるが、そのとき教授方の中には學生の分にすぎたものとて顏をしかめた方もあられたとか。しかし一般には貧しい學生々活のオアシスとまで考へられ、多大の關心をよせられてゐたのである。その開場式を兼ねて開かれた第四回大茶話會には集る者凡そ八百七十名であつたと云ふ。當日會場で總長たちの繪葉書を買ひ、それにサインを求めたこともほゝゑましい風景

であつたらう。

三



學生集會所開場式

當時の運動會は既に早く本學創立の翌年三十一年頃組織されたが、當時の學生々活に於いて此の方面の華と謠はれたものは何と言つても春秋二季に行はれた水陸兩大會であつた。水上大會は陽春の頃大津三保ヶ崎又は石場に開催せられるのを例とし、學生は徒歩で大津まで觀覽に出かけたものである。當時は四師團軍樂隊を聘して奏樂をし、京都にあらせられる賀陽宮殿下には、特に御臨場遊ばされ、ビールを御下賜なされたことなどもあつた。競漕の種目には教授學生對抗競漕、職員競漕、專門學校選手競漕、來賓競漕、分科大學選手責任競漕等があることを知るだけでも、うらゝかな春日の鴉の海上に展開された和氣靄々たる情景を思

ふ事が出來る。文科大學ができた二年目であつたか、琵琶湖上のこの花やかな競漕會に選手を出したものである。その選手には、現、東大寺の執行、鷲尾隆慶君もゐた。舵手かコーチヤーには、若い故澤村專太郎教授もゐた筈である。陸上運動會の花やかさは、またこれにゆづるものではない。賀陽宮の若宮殿下、由紀子女王殿下が朝早く、運動場、設けの御座席にお着きになつてゐられたことが輝かしく見奉られた。運動場は、今、工學部建築學教室などのあるあたり、大學構内の東北隅で、吉田山、如意嶽の翠が、圍むごとくに見えたところである。文學部の選手には、哲學科から小野寺精一郎、史學科から樋口波禰太郎、西田直二郎、文學科からは池田多助君が出場して、法、醫、工科の選手と覇權を爭つたことがある。この日は滿都の若い士女が着飾つて、臨時に構へたスタンドの上に花の咲くごとくに立ちならんでゐた。旗やリボンには紫色を以てカレッヂ・カラーとする文科大學は、淡綠色の法科大學にまけぬほどの應援者をもつてゐたのである。

當時學生の下宿と言へば吉田方面を第一とし田中村下鴨村方面に及んでゐたらしい。大學は元尾張藩の屋敷跡に立てられたものであるが、何しろまだ北

白川から銀閣寺にかけて蛙の聲もかまびすしく、聖護院には名だいの大根畑が青々としてゐたころのことである。京都は日本では最初に電車が敷設されたところではあるが、大正の初年東山線が熊野まで開通する迄は、電車は、丸太町寺町が、支線となつてゐて、出町が最寄り停留所であつて、しかも木屋町線の四條以北は夜は九時半過ぎには運轉を止めたため、學生等はいつも四條木屋町から徒歩で、吉田まで淋しい夜道を歸らねばならなかつた。かうした靜寂の古都の環境に在つて、文科大學の學生たちは、農家の日あたりのよい草屋に假居して思索もし、考證に力め、創作もしたのである。

なほ明治四十三年の學生學資金概調によれば、「一ケ月拾五圓以上貳拾五圓以下普通貳拾圓五拾錢にて可ならん」とあるから現今の生活に比して貨幣價値の相異はあるとしても約二分の一位の學資であつたと思はれる。

四

大正時代の十五年間は、近代日本の重要な轉換期と云へる。我が文學部の學生々活も亦、時代の複雜な世相と共に社會的な消費生活者として、大きな變轉を

示してゐる。

大正三年彼の世界大戰の勃發の餘波をうけた所謂「戰爭景氣」によつて一般物價が暴騰した時であるから、學生層も亦多大な影響を蒙る事となつた。大正七年の米騷動の時を經て學生々活の恐慌時代が現出した。然し此の變態な經濟的活況も大正九年の恐慌となつて現はれた。

斯うした社會的混亂に當面して、學生の社會科學研究に趨くものが多くなり、その研究會の活動も大正十二三年頃から次第に頭角を現して來た。本學に於ても學生課が思想問題に深く注意するやうになつたのも此の頃であつたが、大正十五年十二月には遂に有名なる學聯事件を惹起するに至つたのである。

けれども大正期に於ける學生層の思想的主流と言へば、まづ第一に近代自由主義の思潮を擧げねばならないであらう。而してこれと歩を同じくし、聯關を持ちつゝ遂にその全盛期にまで達したのは獨逸哲學の流れを汲む理想主義の哲學であつて、これには京都の學問は大に關係するところがあつた。從つて大正期、十四年間の學生々活は、末年になつて、社會的な混亂があつたとは云へ、本學

部の發展に隨伴して、概して健實な歩みを續けて來たと言つてよい。尙ほ、此頃の著るしい現象として、學生數の急激な增加がある。文科大學開設以來大正の初期を通じて全學部入學者數は年々五十名內外にあつたものが、大正十一年には百名、十二年には百四十名、と漸次增加の傾向を示し、十三年より十五年に至つては一躍三百三十名の多數に飛び上つてゐる。斯うした入學者の增加傾向こそ、後年、昭和の初頭の經濟的萎靡によつて學生就職難なるものを現出せしめる一つの原因となつたのである。

けれども大正の中期七八年頃より末期に至る數年間は、當時財界の好況によつて、學生が靜かに學問研究に沒頭することを許さざる狀態となり、敎育界のごとき、直ちに人無きを歎ずるに至つた。かくて中等敎員の不足を補ふ爲の第七臨時敎員養成所が、本學部に設けられたのも大正十二年のことであつた。

又一方に於ては、學生の親睦その福祉增進の機關として生れた京都帝國大學學友會は、大正二年三月從來の以文會運動會を合併したが、大正五年には既に十一部を有する程の盛況となり、大正十二三年頃から、當時華やかなりし政黨政治

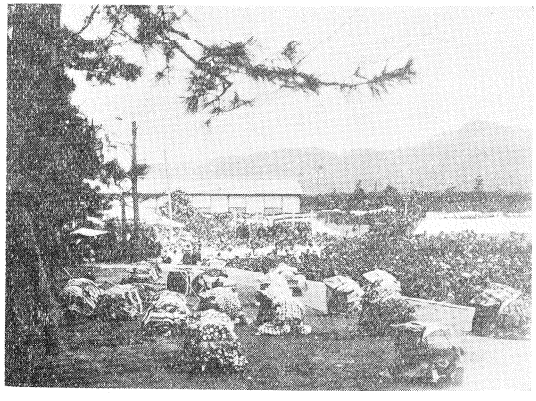
の影響を受けて、その代議員選擧に大がゝりな宣傳が行はれる樣になつた。

現今の如く運動週間の制度が作られて東西兩大學對抗試合が行はれる樣になつたのは大正十五年以來である。

五

彼の明治期學生々活を華やかに彩つた秋季陸上運動會は、その後十六年間の久しい間中絶されてゐたのであるが、大正十年に至つて再び復活され、その第一回大會は十一月七日下鴨運動場に於て擧行せられてゐる。當日は復活第一回といふので頗る盛會を極め、特に我文學部に關係しては、十一年度運動會について、或る委員がかくかきつけてゐる。「尙學內の競技に就いて愉快に感じた事は、競技に於ては最敗者であつたけれども百五十人足らずの學生しかない文學部から初めて對學部選手を出した事である、選手は哲學科の二年生が主であつた。由來哲學者の卵などは競技などには無關心なものと心得て居つた所が、不肖招かれてコーチをし其眞摯なる態度に敬服しました。斯る哲學者からは今正に大亞細亞の盟主たる我國に吾等が要求するポジテフの所謂强者の倫理と道義

とが說き起されるに違ひない。起さるべき筈である。斯くて最敗者たる文科選手諸氏に一層愉快を感ずるのは……翌日から再び練習を初めた事である。槍を購ひ圓板を求めテープを用意して毎週二回下鴨グランドに練習して居られる」と。これ、その時代文學部學生の一面を如實に物語つてゐる。この外大學全體の催しではあるが、創立記念日當日の大園遊會は、大正十二年頃に始められ、昭和七年度までつゞいてゐたが、殊に盛會であつたのは、大正十四年五月十七日本學創立二十五周年記念日當日の、運動場での園遊會であつた。この日には御入洛中であらせられた東宮殿下の台臨を仰ぐの光榮に浴したのである。當日最大の呼び物は曾て伏見宮殿下の台覽を賜つたと云ふ、尾上松之助演ずる所の「開城の日の大石」と云ふ大ペーヂェントであつた。「フイルムでお馴染の松之助の目玉も此の



學友會園遊會餘興

日は特別に大きく輝いた」と云ふ事である。

六

昭和期、十年間の學生々活は、その前半に於ける社會情勢の不安と動搖が學生々活のそれにも深く影を深めてゐた。

世相の不安の裡にあつて、學生層に於ては、マルクス主義思想が考究せられ、昭和の初頭には學生共濟部が設置せられ、食堂の經營を始めたことがあり、昭和五年、六年には學生消費組合運動もおこり貧困化した學生々活を問題としたのである。しかし、今や學生の間には東亜の形勢、國際的日本の地位、國民文化の問題等が、その心を惹くものあつて、深く内に省みて學内漸く沈靜し、學生々活は再び聖なる學園としての本來の姿を示しつゝある。